上顎右側中切歯の唇側近心に副根を有する稀有なる一例

九州歯科大学第二解剖学教室 (指導 灘吉 教授)

九州歯科大学第一解剖学教室 (指導 中山 教授)

山 田 博

I 緒 言

人類の歯牙の中で切歯は単根であるのが普通であるが往々にして下顎切歯の二根分岐傾向或いは上顎側切歯の舌側面に附加的な小さい副根を見ることがある。然しながら上顎中切歯に於ける副根は極めて珍しいものであるといわれている。私は最近当教室に於て集めた抜去歯牙の中に上顎右側中切歯の唇側近心部に小さい副根を有しているのを発見したので甚だ興味深く感じ敢て茲に報告する次第である。

II 知 見 例

この歯の外形は一般の中切歯の形態と大差はなく、その大きさは表に示してある如くである。即ち正常のものに比べて唇舌径が僅かに優る程度で他の部は少々小さい歯牙であつた。歯冠部に於ては唇側面は唇側面溝或いは隆線等の存在は認められ大体に於て平坦であつた。舌側面はかなり咬耗せられ隆線、溝等は著明でなく唯辺縁隆線がよく発達していた。又極く微弱ではあるが棘突起が二個認められた。切端も又咬耗せられ切端結節は認められなかつた。

歯根は大体に真直ぐで円錐状を呈し近心側に縦に走る隆線が認められた。而るに根の唇側面の近心側に於て小さな突起状の副根が見られた。これはその近心側は近心歯頸線湾曲の頂点の直下より縦に走る溝によつて主根と境せられ、その溝は少々唇側に向つて走りやがて主根と完全に分岐していた。又遠心側はそのような溝の存在は余り著明でなく、完全分岐する位置よりも約 3.5mm 前から分岐傾向を示し始めていた。完全に主根と分岐する位置は唇側部歯頸線より 6.9mm、又根尖端よりは 4.0mm の所にしてその長さは完全に分岐してから 1.0mm であつたが、近心側に於ける溝で分岐を見せ始めてから副根の尖端までの長さは 9.2

mm であつた。又副根の幅は尖端近くで 1.1mm であつた。

主根に於ける髓室は正常のものと同じで根管も単一であつたが、副根はレントゲン像によつて明らかにこれを認めることが出来なかつた。

III 考 按

人類の切歯は前にも述べた通り単根であるのが普通であるが、往々にして二根性の歯牙が出現することがある。然しながらこの二根性というのが下顎に於ては殆ど等値の唇舌二根に分れており、又上顎側切歯も大体に於て唇舌二根に分岐しているもその舌側のものは基底結節に相応した附加的なものが多いのである。然して上顎中切歯は斯る二根分岐傾向或いは副根といったものの出現は比較的少なく非常に珍しいものとされている。本例の如く歯根の唇側近心に副根を見るが如き例は村上氏が之と同様な例を報告しているに過ぎない。尚この村上氏の例に於ては根管も分岐していたと記していた。又川合氏は上顎側切歯の歯根遠心側に附属根のあるものを報告しているが舌側面以外特に唇側部から分岐する副根の例は非常に珍しいものである。

斯の如く切歯の二根分岐或いは副根といったものが現われるのは復古的現象であると説く人もあるが、現今の哺乳類の切歯は全部単根性であるということからしても必ずしも復古型の出現したものと説明することは出来ない。寧ろ藤田氏の述べている如く歯胚の分裂によつて生ずる非法則性のものと考えるのが至当ではなからうか。

IV 結 論

私は上顎右側中切歯の歯根に於てその唇側近心部に小さな附加的な副根を認めた。

凡そ上顎中切歯の二根分岐傾向乃至は副根というも

のは稀にしか見られず、本例の如く特に唇側近心に出現するということは甚だ稀有なる例に属することである。これは復古的現象と考えるよりも歯胚の分裂によつて生ずるものではあるまいかと考えられる。

稿を終るに臨み御指導御校閲を賜つた恩師難吉教授に対して深謝致します。尚又御援助を賜つた中山教授に対して深謝致します。

参 考 文 献

河合卓治：臨牀上考慮すべき附属根を有する上顎側

切歯の一症例、口腔病学会雑誌12（昭13）

松田祐麿：二根を有する前歯、臨牀歯科13（昭16）

村上元俊：過剰根を有する人類歯牙六例、口腔病学会雑誌12（昭13）

所 敏一、三沢捨雄：二根を有する人類上顎中切歯の一例、日本歯科学会雑誌28（昭10）

山本義茂：二根を有する上顎側切歯の稀有なる一例
新歯科医報229（昭11）

藤田恒太郎：歯の解剖学（昭24）

附 表

		本例歯牙の計測値	上顎中切歯の平均値 (藤 田)
歯 牙 の 全 長		2.15cm	2.38cm
歯 冠 部	近 遠 心 径	0.83cm	0.86cm
	唇 舌 径	0.75cm	0.72cm
	長 径	1.07cm	1.17cm
歯 根 の 長 径		1.08cm	1.21cm

図 1

図 2

A RARE CASE OF AN ACCESSORY ROOT AT LABIO-MESIAL SIDE OF MAXILLAR RIGHT CENTRAL INCISOR

by

Hiroshi Yamada

Department of Anatomy, 2nd Section Kyushu Dental College

(Director : Prof. Dr. Nadayoshi)

Department of Anatomy, 1st Section Kyushu Dental College

(Director : Prof. Dr. Nakayama)

A maxillar right central incisor with an accessory root at labio-mesial side was found in a mass of teeth accumulated in our laboratory.

Survey of literatures reveals that not rarely tendencies of root branching in mandibular incisors and accessory root in maxillar lateral incisors appearing at the point corresponding to cervicomarginal ridge on the lingual side of the root have been so far observed. However this instance of root branching or accessory root in the maxillar central incisor is rarely heard in the literatures, and it is most interesting to see that here the accessory root has developed on the labial side of the incisor.

The tooth was generally normal in shape except that the accessory root was seen as a small protuberance. In the mesial side of the tooth a groove started from directly under the top of the mesial gingival line and proceeded aslant toward labial side of the tooth increasing the depth between main and accessory parts of the root and finally ending with complete branching of both. In the distal side of the accessory root no such long stretch of groove was found except weak depression present in the vicinity of the root branching.

The root canal was not detected in the accessory root even by means of x-ray examination.